



複合的な生活課題を抱える
シングルマザーの生きづらさと
「母親規範」「家族規範」

横山 登志子（札幌学院大学）

—
日本社会福祉学会第71回春季大会
シンポジウム「揺らぐ家族と社会福祉—
子どもが育つ環境をどうつくるか」

複合的な生活課題を抱えるシングルマザーの生きづらさと 「母親規範」「家族規範」

フィールドワークを中心とした調査研究

- ・複合的な生活課題を抱える母子の生活支援（母子生活支援施設）における支援者の「多次元葛藤」のプロセス
- ・シングルマザーへの母親支援にみる「母親規範」の強さ（抑圧性）
- ・DV被害者の緊急一時保護の実態調査：「その後」の転居率・連絡の途切れ

理論的に問い直す

- ・ソーシャルワークにおける「家族規範」「母親規範」の問い直し
- ・ジェンダーからソーシャルワークを問う（理論的・実践的な問題・課題）
（ジェンダーセンシティブな支援において）

(1) 実践をジェンダー・センシティブに振り返る

・支援者による母へのまなざしの強さ:「母親規範」<「家族規範」<「ジェンダー規範」

「子どものために、お母さんこうしてくださいね／こうしないといけないよ」

(「母よ(子のために)変われ」とする日常的なメッセージ)(父親の不可視化)

・当事者・支援者が前提とする「家族観(近代家族)」への閉塞感・違和感

「家族が一緒にいることが大事」「家族なんだからこうしよう」

(無理な状況での情緒的な家族神話の共有が、逆にクライアントや支援者を追い詰めていないか)

・ 支援者が母親について語るインタビューの3つの呼称

- ①「お母さんは〇〇した／〇〇してほしい」（「母親」役割の遂行）
- ②「彼女は〇〇なんだよね」（「クライアント」を語る）
- ③「（名前）さんも〇〇だと思うけど私は・・・」（一人の「女性」のLifeを語る）

「母親役割」を棚上げした時は相手を「彼女」あるいは「名前」で呼んでいる。

さらに「要支援者」の枠組みにおさまりにきれない違和感や感情を生じさせる「名前」語りには、支援者自身の熱情ある「一人称語り」がたびたび登場した。

この関係構造の変容に、クライアントとの協働可能性を見出せる。

⇒ 支援者とクライアントの関係構造の崩れ（問い直し・省察）

⇒ 社会構造を問う視点の萌芽

(2) 理論的に考えを深める：母親へのまなざしの抑圧性

✓マーサ・A・ファインマン(2004=2009:136)『ケアの絆 自律神話を超えて』岩波書店 (ジェンダー法学者)

「母性はひとつの構築された社会的・文化的役割であり…。この社会では母性に対する一連の期待が存在する。…それは、半ば強制的に機能し、規範的観念を押し付け、行動の良し悪しを決める。」

✓エリザベート・バダンテール(2010=2011:198)『母性のゆくえ「よき母」はどう語られるか』春秋社 (フランスの哲学者・歴史学者・フェミニスト)

「規範意識は、…ドイツ、イタリア、日本という三大先進国の文化において強くみられる。…共通するのは、母親としての役割を過大に重要視しすぎるあまり、それ以外の女性のあらゆる側面、つまり一個人としてのアイデンティティがあたかも存在しないものとして扱われてしまうことだ。」

✓大日向雅美(2016:245)『新装版 母性の研究 その形成と変容の過程:伝統的母性観への反証』日本評論社 (心理学者)

「母性とは『女性が母としてもっている性質』」であるが「概念そのものが不明確かつ多義的」であるにもかかわらず「母性は女性の生得的特性であり自明なもの」とみなしてきたために、「母性を絶対的なものとみなす風潮が根強く存在していること。」

✓田間泰子(2001:4)『母性愛という制度 子殺しと中絶のポリティクス』勁草書房 (家族社会学者)

「母性の罫はそれが愛情深く犠牲的であると措定されている点にこそあり、そのために自らの加害者性や差異をもたらす境界…を、そして自らの他者性をも忘却しやすい」。ゆえに「母親たちは、自己の存在理由を主張したいと思えば思うほど…進んで巻き込まれ」「(社会は)…社会的圧力として統制のために利用している」。

✓井上清美(2013:287)『現代日本の母親規範と自己アイデンティティ』風
間書房 (家族社会学者)

「制度的レベルでは近代的母親規範の相対化が進行し…た。しかし、少なくとも状況の規範というレベルで、…近代的母親規範は効力を維持している。」

注) 状況の規範例:

リフレッシュ利用で子どもを他者にあずけ、それを隠す意識もないが、それに対する批判もあることを知っており、その葛藤を回避するために自分で子どもを見る行為を支持していた。

まとめ

- ・このように、母親およびケアの担い手は、自立した「**個人(近代個人)**」に対して、**低い立場**のまま暗黙視され、かつ**ケアすることへの強い規範性を付与**されている。
- ・母親規範が主体的かつ適切に内面化され、遂行されることによって、行為者が**賞賛あるいは非難**され、それは**自己責任化**されやすい。
- ・これらのことが、**最も典型的にあらわれるのがシングルマザー**である。
- ・社会福祉およびソーシャルワークの文脈においても、以下の先行研究において**たびたび指摘**されてきた。

杉本貴代栄1999;大塩まゆみ2000;須藤八千代2007;須藤八千代2015;安田尚道・塚本成美2009;中澤香織2009;神原文子2010;藤原千沙2012;中野冬美2012;井上清美2013;湯澤直美2013;江原由美子2015;流石智子2015;横山登志子2018など。

まとめ

・「母親規範」の前提を問うてみよう

複合的な生活課題を抱える母が、「母親役割」を十分に果たせる子ども期があったのか？また、その母を支える「まなざし」のもと多様で・柔軟な・即応的な社会資源があるのか？父親はなぜ問われないのか？

・社会構造的な女性抑圧のメルクマールが「母親規範」にあるのではないか？

「父親も育児家事を」という単純な世帯内のミクロ的対処ではない。

ケアという行為そのものが有する社会的意義を再確認し、母親／女性の経験や知識をないがしろにしない（中性化せず）、もうひとつの「母性主義」論への着目

ここまでのまとめ

- ①複合的な生活課題を抱えるシングルマザーの生きづらさの根底に女性抑圧の構造的問題がある。
- ②それが構造的であるために、支援そのものが無意識的かつ善意からその構造に加担する可能性が高くなる（母親役割の遂行に追い込んでいく支援のあり方の問題）。
- ③母性主義をクリティカルに問い直し、理論的に吟味されているもうひとつの母性主義の視点から支援のあり方を検討したい。

母性主義の相対化という理論的抵抗

- ・ 2つの母性主義という理論的示唆

→ 「本質主義的母性主義」

「戦略的母性主義」（家族社会学・元橋利恵2021による対比）

女性抑圧の根幹の本質主義的母性主義に対するオルタナティブ

元橋利恵(2021)『母性の抑圧と抵抗—ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』晃洋書房

本質主義的母性主義とは、「産む性」としての女性には生物学的に母親的心性が備わっており、それが女性としてのあるべき姿であるという神話ないし規範のこと。産む性である女性／母親が子どもを育てるのが最善であり、そうすべきだという規範や、母と子は身を分けた関係だから何物にも代えがたいとする考え。

本質主義的母性主義の例示

「お母さんなんだから〇〇しないと。」

「〇〇ちゃんのためにお母さんががんばらないとね。」

「お母さんが（子を）ひきとるのが当然だよね」

障害や病気を抱えた子どもの母親が仕事を続けることへの
社会的圧力

「子どもがかawaiiそう」

戦略的母性主義

- ・ 元橋（2021）による抵抗としての概念提示
- ✓ 本質主義的母性主義は女性抑圧の不可視化された社会的装置
- ✓ 経済のグローバル化や新自由主義的な自己責任論に母親がさらされている
- ✓ 公的福祉の脆弱性がいっそう女性を無力化している

- ・ 戦略的母性主義は、基本的にギリガンにはじまる「ケアの倫理」論、第二次フェミニズムのケア・フェミニズムに依拠しており、日本社会における母性主義とそれへの抵抗を分析するための視座として提唱された、理論的あるいは概念的な再定義を行う視座

	本質主義的母性主義	戦略的母性主義
前提	近代社会における「個人」の前提として不可視化されてきた「家族」「女性」に付与される家父長的な母性主義	人が生きていくうえでケアと無関係ではありえないことを前提とした「ケアの倫理」と女性解放をめざす母性主義
期待	母親／女性に対して、産む性に与えられた本質的な特性として「産み育てる」を適切に担うよう求める。	社会や人々に対して、ケアの倫理に基づく公正な社会 ケアする人を適切にケアする社会を求める。
鍵概念	産み育てる、愛情	ケアの倫理、ケアの社会的承認 「産み育て」だけではない、ケア概念への拡張 ケアを他者への責任として社会的評価

		本質主義的母性主義	戦略的母性主義
女性のライフコース と子どもとの関係		<p>① 生む性に与えられた特性として「結婚・妊娠・出産・育児」という連続的なライフコースを想定</p> <p>② 子どもとの対関係によって、母が社会的に承認される。</p>	<p>① 女性のライフコースは多様であり、選択可能である。</p> <p>② 「育てる」は経験的社会的に身に付けていくものとして理解する。場合によっては、「産む」ことと、「育てる」（ケア）をわける。</p> <p>③ 子ども（ケアの受け手）とのケア関係が社会的に承認される。</p>
理論的特徴	寄与	「近代家族」イデオロギーの維持・強化	ケアを担う女性の公正な社会的承認 ケアラーの二次的依存が改善・解消
	問題	女性の抑圧 標準家族と逸脱による二分化 現代の家族実態との乖離	本質主義的母性主義があらゆるレベルに浸透 社会変容に時間を要する

ソーシャルワークに引き付けて考える

- ・要は具体的に何が求められるのか？
- ・具体的な日常実践のなかで「どう理解し」「どうかかわる」のか。
- ・理論と実践の間の空白地帯：あまりにも実践的・研究的な取り組みの蓄積が少ない。
- ・問題認識を共有する先進的／小規模な活動を、実践と理論からつなぐことが必要。

「生きづらさを抱える親子の問題から子どもが育つ環境をつくるために何が求められるのか」

①抑圧装置としての支援を自覚し自らを再ポジショニングする：

支援者が善意から無意識的に母親を無力化する立場に立つ可能性を自覚し、「母親とはこうあるべき」という意識を一度、疑ってみる。

有用な質問「性別が反対でも同じような支援をするか？」

⇒ 竹端寛(2022:214)「**チームで家族する**」という考え

(『家族は他人、じゃあどうする?』現代書館)

「(ママ友や同僚や仲間など)豊かな関わり合いの関係を広げていくなかで、自己完結しない、他者に開かれた世界」をつくることの重要性。

「チームで家族する」=家族メンバーだけに閉じない、親密な家族的な関係性を地域に構築すること

これは、制度を効果的に整備すればいいという話だけでもなく、誰かが家族支援を一生懸命やればいいということでもなく、

「家族を『ひらく』」(林2008)ための制度と支援体制と規範が求められるということ

林浩康(2008)『子ども虐待時代の新たな家族支援
—ファミリー・グループ・カンファレンスの可能性』明石書店

家族が担ってきたニーズを分節化して、
いろいろな担い手が、「チームで家族する」体制を

しかも、そこにネガティブな価値を付随させず
加えて、ジェンダーセンシティブな視点をもって

「お母さんなんだから」思考を手放す
社会的養護にゆだねることは育児の失敗ではない

②人／環境／問題を社会構造的に分析し、支援するためのソーシャルワーク・アプローチが必要

- 「構造－批判モデル」(中村和彦2017)
- 「A-PDCA メタ実践モデル」(石川久展2019)
- 「脱『いい子』のソーシャルワーク」(反抑圧的な実践と理論)坂本いづみら2021) 反抑圧的アプローチ
- 「ジェンダーセンシティブ」な視点(横山ら2020)

これらに共通するのは、
ミクロ的な問題の構造的理解の実践力と、
それに対する社会変革のための方法論

加えて、その方法が社会的協働実践であること

重要なのは「関係構造の変容」

⇒ もういちど問い直す

クライアントは、いかなる経験をしているのか？

クライアントからみて、何が「支援」なのか？

⇒ 3つの問い直し（例えば母親規範／家族規範）

わたしに問う：ワーカーとして、個人として

チームで問う：関係者、関係機関、地域

母とともに問う：ともに再ポジショニングする

「お母さんなんだから」
思考から話していないだ
ろうか？

このかわり、誰かを
抑圧していないだろ
うか？

ひとりで抱えず、チーム
や関係者と対話でき
ているだろうか？

なにか新しい支援メ
ニューが必要なのでは
なく、いまある支援の
「質」「関係構造」を
変えていくことはすぐ
にもできる。